

## 第1章 序章

「限界集落」が問題として指摘されてから20年以上が経過し（大野、1991）、全国的にも人口減少が始まる中、山村集落の現在とこれからの関係については様々な議論が行われてきた（作野、2006；林・齋藤ら、2010；山下、2012；小田切、2014；徳野、2014）。著しい人口減少と高齢化にもかかわらず山村集落での生活が続いてきた背景として、家族と世代の視点が注目されている（井上、2002；徳野、2010；山下、2010）。既存研究は、出身農山村に住む高齢の親に対し、他出先に住む子供たちが、農作業を手伝ったり（荒木、1994；石阪、2002；芦田、2006）、様子を見に行く・病気時に見舞う・電話をかけるといった福祉的なサポートを行なっていることを、明らかにしてきた（立花ら、1998；石阪、2002；石阪・緑川、2005）。一方で、親が集落に居住していない者も含めた他出者に関する検討、共同作業や祭り、自治組織といった家族を超えた地域社会に関する事柄への他出者のかかわりに関する検討は、行われてこなかった。本研究は、研究の視座として親が出身村に居住していない者も含めた「他出者」に着目し、研究の対象として共同作業と祭り、それを支える自治組織に焦点をあてる。本研究の課題は、(1)現代の山村集落における共同作業と祭りの実態を他出者の存在に着目しつつ明らかにすること、(2)その過程で、他出者が山村集落に果たしうる役割とその特性を検討することの2点である。情報収集方法は、居住者、他出者、他出者二世らを対象とした聞き取り調査、他出者を対象とした質問票調査、共同作業や祭りへの参与観察、文献調査である。

## 第2章 現代の山村集落における共同作業と祭り：山梨県早川町各集落の事例から

早川町が2009年度に実施した「集落の実情に応じた維持・活性化のための調査研究」報告書収録の巻末データを質的側面に着目して分析し、早川町の各集落における共同作業と祭りの現状を概観した。共同作業、祭りのあり方は、作業量や内容を縮小、簡略化させ、また、頻度を低下させる方向に、おしなべて変化してきた傾向にあった。しかし、神輿を担げずとも境内に飾るといったように、内容を変更しながらも大切な部分を継続しようとする実践がみられた。人数が少ない動ける居住者に負担が偏る中、まかないきれなくなった作業を行政や業者による専門的サービスに頼むという対応や、他出者への協力要請など負担を共有できる範囲の検討が行われていた。

## 第3章 山村集落と他出者：山梨県早川町茂倉集落の事例から

茂倉集落では、1970年以降に他出した44世帯中40世帯が、自治組織である茂倉区の一員として、区費の納入、年2回の総人足への参加か不参料の納入、区総会への参加といった役割を果たしていた。総人足に参加した他出者の約8割が、親が集落に居住していない他出者だった。区会議員など区の役を務める他出者もいたが、区長・副区長は居住者が務めていた。他出者は、集落の寺の檀家、神社の氏子であり、関連する祭りにも参加してい

た。

集落へのかかわり方や生活上の重きのおき方は、人によって様々だった。行事に限らず出身山村を日常的に訪れ、耕作、養蜂、家屋の手入れなどを行う他出者が集落のケ（日常）の側面を、お盆やお彼岸の他、年度初めに配布される区の年間の行事予定を参考に総人足や祭りなど特定の日程に帰省する他出者が集落のハレ（非日常）の側面を支えていた。集落で過ごした経験を持ち、その後も集落に継続的なかかわりをもっていた他出者は、集落の自然・歴史に関する知識、技能、作法を共有し、居住者、他出者らとの間に親交と仲間意識をもっていた。それに加え、家産を所有し、先祖に関する事柄や他の家との結びつきに関する事柄へもかかわり得るといった、家の成員であることに起因する特性ももつ存在であり、家や区的意思決定にかかわり得る存在だった。しかし、災害や不祝儀のような突発的な物事に対する対応や、多少の労力であっても日々継続的に行う必要がある仕事に関しては、居住していないためにその役割に限界があった。

#### **第4章 山村集落における祭りの変容と他出者：山梨県早川町茂倉集落の事例から**

茂倉集落の春祭り・夏祭りは、若者組の解散、保存会形式での運営を経て、区役員と氏子総代による運営が行われるようになり、その後、御輿、相撲が子供御輿、子供相撲のみに縮小された。若者が減少する中、その時々祭りのあり方や担い手が他出者も含めて検討され、納得できるあり方で実践されていた。祭りの変容とは、これまでの慣習・規範と、現状との間に折り合いをつけた実践をし、新たな慣習・規範を共有することだったと言える。また、他出者は、必ずしも居住者と同等の責務を果たすことが求められておらず、他出者によるやれる範囲でのかかわりが認められていた。

#### **第5章 居住者のいない集落で続く共同作業と祭り：滋賀県多賀町杉集落の事例から**

杉集落は、居住者がいなくなっただけで既に40年が経過しているにもかかわらず、2014年現在も杉区としての活動が継続されていた。現在、杉区の活動に参加している人の多くは、他出時期には子供や学生で、親に伴われて他出した世代だった。他出世帯は、現在の居住地と杉集落の自治組織の双方に加入していた。杉区のメンバーは、神社の氏子、寺の檀家のメンバーと一致しており、神社の祭りや寺の行事も杉区の行事予定表に含まれていた。寺、墓、神社、共有林といった資源の存在が共同作業と祭りの定期的な開催につながっており、これが他出者間の交流の機会になっていた。森林のように動かさない資源が集落の場所に存在するため、集落の場所に集まった作業も行われていた。他出者間の人的繋がりは、同時に、集落の場所に根差した繋がりがかった。

#### **第6章 総括と結論**

居住者の減少と高齢化の中、共同作業と祭りのあり方は、作業量や内容を縮小・簡略化させながらも継続されていた。これまでの慣習・規範は、現状との間に折り合いをつけた実践を通して、新たな慣習・規範となって共有されていた。こうした中、茂倉集落では、非居住世帯も含めた他出者が、共同作業や祭りなどを通して自治組織の一員としての役割を継続的に果たしていた。親が集落に居住しなくなった後も他出者が山村集落にかかわり

続けていたこと、家のメンバーとしてのみならず村のメンバーとしても他出者が一定の役割を果たしてきたことが明らかになった。また、他出者は、集落への継続的なかかわりによって得られた経験的特性に加え、従来の子の成員でもあることから、家産や先祖などに関する事柄にもかかわれるという外部者では獲得しにくい特性をもっており、重要な存在だった。居住者がいなくなつてから40年が経過した杉集落において、共同作業と祭りが他出者によって継続されてきたことから、居住者がいなくなつた後もなお、集落の営みが続いていく可能性があることが明らかになった。共有・共用する資源とそれをめぐる定期的な契機によって人々が直接的に繋がり合い、また、土地に根差した資源を通じて人々と土地とが直接的に繋がりあつていた。たとえ居住していなくても、かかわりを持ち続ける他出者などによって、山村集落の営みは部分的であれ続いていく可能性がある。他出二世世代がかかわりを持ち続けるかに関しては、他出者や他出二世、さらには社会全体としての、今後20～30年間の山村集落とのかかわり方にかかっているとと言えるだろう。